

七二

新選百物語

2286



一の巻目録

初版の志をいしお儀の療治

三條倉う不測乃出倉

うりつえを裡汁の含傷

二の巻目録

嬖妬小はるれ梵字の四

嵐小らくきしるる乳

三の巻目録

立論ししが因果のり

世の念が憂のり

四の巻目録

紫雲とれびく窓まの玉

後炮の雲ふきく備所の命

我身そせと細樹の所

袴の紫とるまき後宣

五の巻目録

心いよりぬ塵塚の義士

水筒により三人兄弟

鬼小井らく五人の悪者

困を憂そくこの度の嫁入

新選百物語 卷一

○初段 杖をまね折傷の療治

物の名を不^ふ下^げもその所^{ところ}がたゞとて男女のすくも時代
よて黒白のあがひあり小火に振袖とをせ七八歳まじり
頭と利^り六^{ろく}府^ふ紙^し考^{かう}を揚^あぎせり皆^{みな}善^{ぜん}陽^{やう}の氣^きと茶^ちは
りかみなり終^つつた途^と代^{だい}小^{せう}火^か五^ご六^{ろく}歳^{さい}は袖^{そで}をくち燈^{とう}籠^{かご}と
く又^{また}あまの草^{くさ}はひは鬪^ぶ尻^{しり}の石^{いし}割^{わり}者^{もの}諸^{しよ}考^{かう}のやれ
六十歳^{そじう}の老人^{らうじん}ふまに引^ひくあかちるくすう紙^し考^{かう}の
一^いち如何^{いか}様^{やう}の風^{かぜ}俗^{ぞく}や井^いきまのいせにふく
ひり諸^{しよ}考^{かう}に紙^し考^{かう}けりて器^きをくち然^{しか}つて飛^とび

一^いち與^より室^{むろ}に栲^か列^り西^{せい}高^{かう}津^つの所^{ところ}紙^し考^{かう}とあまの
至^{いた}極^{ごく}の場^ばありと毎^{まい}日^{にち}く栲^か身^みと券^{けん}をつくと紙^し考^{かう}の地
室^{むろ}に五^ご色^{しき}乃^な花^{はな}方^{かた}六^{ろく}とくはく今^{いま}あを井^いくちり折^しり
傍^{かた}にじは本^{ほん}町^{ちやう}は松^{まつ}越^こや後^ご七^{しち}とよふ人^{ひと}あり町^{ちやう}合^あれも武^ぶ藏^{ざう}
をたかき血^{けつ}氣^きさうんの若^{わか}者^{もの}をりかあま日^ひ西^{せい}高^{かう}津^つの
紙^し考^{かう}と見^み地^ぢ水^{みづ}葉^はをよ傍^{かた}をく巾^{きん}懐^{ふく}中^{ちゆう}より煙^{えん}筒^{とう}を
かま其^{その}不^ふ一^{いつ}面^{めん}はく人^{ひと}ちりてそやや喧^{けん}嘩^かとくつり
よそのまよと下^{した}へと殺^{ころ}す人^{ひと}仰^{おほ}文^{ぶん}の肩^{かた}と風^{かぜ}う唐^{たう}文^{ぶん}類^{るい}に
まかりの鬚^すを耳^{みみ}かいて捨^すてまき其^{その}奴^{やつ}たや若^{わか}者^{もの}はよ
踏^{ふみ}よたけり罵^{のの}りまう年の比^ひ三^{さん}十^{じゆう}五^ごの人^{ひと}と見^みえく

男の男はさ女之四乃女を傳ひ着七少茶よ赤也
毛のふきふは意ゆましきのふ母が百ヶ日今日妹を
同送とて天王寺へ参りて不安井坂を妹がすすめを
舟をきけりてたれもつてさ處くの雲はまて妹はひき
かふるゆ人見のりてきたびてゆめゆめゆめゆめ
今しききた及し傳は移下されとれかけれ着七を
終不見と参り死なれも終まていふ男氣これ
はやくはるまきかんと接手あやく接授とれも一妻
に合意まて其奴をもふさゆつて着屬へ相のまはせとて
臂すのふ着七が首毎相て行くる人かやく

大乃男と参りて只一着身遣へ赤らひ穢か者ども一
二人を中歩殺せとて参りて投てらつてあつたれや
二人を肩にかけく川をこの軒渡さの道に極はけり
槍をさして傳れうち棄てて逃のひをれを伝えいざわ
くつて参りて追來る人も見へたれをつまも安堵一息
つき着七の小参にぬまけぬせ井あくか何もの人ぞと
参りて彼男顔を地につけあまよはき思ふようさり
み寂茶よりけ若芳のゆをさし参りてあ人も危
不を相まぬま言語又絶くかすけりりれりけく
されはゆ身又赤らひ参りて参後よりわてがけ

さういふ極秘のあ人の本津村は藝居のつとを後派合吾と
Pのの毛から私の妻不慮此の苦多うけP之他生の
縁とよPべき方候のいづれよりけりこの名いづくや
間もれを私の場より本町迄は住居しては私親や七
とP者まづのいづれより恙なく何よりよくたきのみ方を
かぐあふまものたるを待け居るをあれとてまゆめ
ゆまゆを氣吹くゆふをまてきりPえいこの世にあり
たれを後派合吾のまのぞりゆりゆりゆりゆりゆりゆり
まもまゆまゆまゆのふしてのまゆも鎌倉のまゆと見えゆり
ゆりまゆら連四方山をゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

一 新編 浮城物語 一

帰る者七た一人の目等と固めてはあゆむはむかう十四
五人をゆくまはるまはる何事やんと道とまはるまはる
に刺さげ男者七をまはる見て井のまはるまはるまはる
いせまのくまを相圖ふまはるまはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるの場かれを命吹りに御布とまはる
勢にまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる
まはるけん合吾の鎌倉とまはるまはるまはるまはるまはる
五人のまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる
に連くまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる
まはるまはるまはるまはるまはるまはるまはるまはる



かひよはふれ
又いふぞ山か
けりて人さ
人のうしろ
あは
せぬ
ま

抄たふと氣を付れを内室の座敷へてあてて
 是邊舟出舟まで先子の間乃抄多くさき茶の申んで
 茶あけまき酒あがふかひのち種を色香合せし地
 先にお氣を入て遠慮す先かひらと物出か人
 と茶の令吾のまよとまの酒飲や今日何分そ
 かあの中りゆすはせの不思議なく共ゆりもまよ氣
 ばらふれを今宵の寂ふ中り夜あきてゆりや
 久しむせんおま外を休ててゆ風言の加減もよ
 まらふ入をじませ令吾のまよゆらに控慮がた
 ありは後七も座敷なく扱くは流志なきさうの
 あい風言ゆえあま作さると歩達入ゆつたれつと
 不儀に頭を風吹とす焼火うち清きさうり鼻の
 下と行つたは抄本のぬきさ如き先かひらまよ二返
 ちてはしらく人きもやと物出は後七中りくつさあさ
 とそれの家もさく袖衣のはせと思ひか今耳にんや
 ゆらにさき守の申子乃善夜もやのくと明かふに衣敷を
 あまにしりしにさなる古榻の泥乃まよとらなき風言
 そし甘いく丸さう何とやうきと氣休めく衣敷と考
 ね着れ種ばらうよゆけて頭まよた越後柳まよさ
 かましく道よて風言屋よ身を清ち何とら顔つさいく

繪はつらう嬉はきよもゆききとぬらん事又行なう
かあけはまはきでゆあうと止まると存きも唯今
のほろも人の万物の長くすも思ふる事も有ゆ
乃よのまじあまもろをふり二人の内是れ一人は
屋一其内いつくまきとぬれまは文治もまは歩多
魂あけ毎のあ一人地獄に墮入くつる事責め
かにもた一れはあはさど毎日ひち戯れくあを
念はし海増ぬ其後やへく久居まき勢列は引ける
おつは治の病氣かれを足踏まくのいと後い久たつ
柳は近つと又つる勢列を重近目まのうるは
折居る物あり

のこまう陸多昔生きたと懐より草まきとあ
あそれ文治候は柳をあぢけ原をいのりあま
田口を帯んとけやまも樂なりかは怪や瘡の中
痛もつくと重氣あれを重なる事も重なりし
ゆりだ魚先日にもやあうがと死ても毎念と
ゆりあまはれ長を夜もあけ初は久居まきあま
之ぬりあまはれ長を夜もあけ初は久居まきあま
いふとあまはれ長を夜もあけ初は久居まきあま
せあくはあまはれ長を夜もあけ初は久居まきあま



らんごの
りてと
ありち
ちさよ
あま

ちが
あつ



かんばちんち
へらの
久
あつ
あつ

まぐろ
まぐろ

てま

あつ
あつ
あつ

まに別過たうむくし粟田口千のれをひくし
弱くし杖よをもて着る人けり文治をれ合意の初
ぬすし柳燈をよく免れぬふかき文治をれ
侵ますを社をいふ文治をいましぬすや長ふて
只をすつて又初みそえれを病後の瘦も有し
病氣のつそとぬねま行はつし息をすて病氣
何よりそくし憂く我志をさてや言ふくお月
即ち生し我の病氣その後下々の怒くすをがら
彼をす生してつて遠を者よりぬか今月い必を
抄ぬしる遠いといふをうすりし書

久重つたきのくつし海城の隅くする存を
さしし不吉生とてれを文治のれをよ病後ゆや
侍のく杖よもつて急しそいせそくち連を
四糸をそあじく久重つを川をり懸命町き用事
おれを我のしゆよりぬすし先くこれ論進人と共く
左宮のしゆれ久重の我家にぬれぬ親の言て一
の指抄ぬれを又久重の文息つてつそくかさつそ
か比國のしゆや井原ぬれんと志願入る親あより
久重のいぼく何のまのやよく傍をきうれを
おそれぬ親をそを前へ不詮ぬるま生たり終は

ゆくりとびるべしとて一巻の之を讀むとて其
の半とて入るれを久しき文よむい先やとて
入排燈を粟田口とて論じしは隣の文治腹中後え
よくとして杖より私をむくいとて私の園にて
竹のわいぐつひくの葉をわれの彼人の葉より
病後の人より遠歩り内より富むをわれの半の内
よの相合まねね私の氣けごと思ふやとて是より
よと連ぶらぬしう文治より用半ありて蘇屋町へ
まうれとて苦くけよといふ是のぬ親のぬかへ
親見あをめまれく云ふふかうはけあてくあり

新選百物語

て又久き不審なる新付て久きあつてこれに
何そいやと論まねき一通中のはるきやとて又
内腹の病つきやん医師前へといつてはるきを
屋いらく寝て休むと石あり私に久き大よ
私全く病氣の論議つれやけに色をい何
やんつぬりきやを玉のさくこ色をい何
是をい兩款のさくをて折へ先やと其方とね
文治のこれ園へむられく四巻まで同送あり
折るやとてはるきまにあらは又い方とて
その方に少せまに尋ひえんとていふは文治のめ

言し其方どつる 藤原 又彼人ゆききしとみも
あはれ風の心地とありけるが故に重なる病いのま
まれく夫婦と唱ひ又ある何事やんと新けあが
寂寂いのちも是までなり今し傷みて所子息(おぢ)
にのみ死とるま 志き男一のまけとなりつとく
小りたれど公の中押をれ異く思へつて
ふと涙をぐはたのまれが今日益す(又)養生せ
らまき言くた藤原送あ世志多に文治出むつれ四
衆意まで同返といぬ其方乱なり又狐の足ふと
茶と医者者といひ多るが今その方が様ふとい

初選百物語

或も此氣をみされどつ時半そとるあまは
久長あいらと斗(う)り氣をなれと雨敷あつて水と持
き茶を用ひやりくと蘇生まは久たあまそと流
文治死してを魂(たま)を傳り 朋友の信をたふとてい
我(わが)まきとつと又絶へと茶をあ文治日あまりに
おぼもれに文治が墓而(参)詣してまれ父母あれば
初髪して貴靈の依も弟の如く(海)邊に鉄(てつ)也
はぬ親きをいぬりかふへ一我(わが)れより貴靈(きり)り
いなり雨(あま)親を昔(むかし)育(そだ)てと墓(むら)まむりて物(もの)を
るれり後(のち)に文治が父母親(おや)は死(に)て



か
の
ま
よ
い
ち
の
し
げ
せ
い
ぬ
ぞ



か
の
ま
よ
い
ち
の
し
げ
せ
い
ぬ
ぞ



か
の
ま
よ
い
ち
の
し
げ
せ
い
ぬ
ぞ

か
の
ま
よ
い
ち
の
し
げ
せ
い
ぬ
ぞ

て後の蘇送まで洋ふ亦るくのり夜敷諸差お
の文治が好についぬいさ海海と因縁と今り
そりていほよ

○方のはは狸計れ合傷

今昔武回信玄公と上杉謙信公と一を沛和睦
相とのい涉森將は國さひも馬るは対面方
をさる奉納をつきて掃除をさる謙信公の農
民作を掃くつものあり掃除の人まふされて毎日
とほりあたる我日作氣役まあける邊りて岩根と岩の

新編下加巻一

生るる不を足けを石裡一足附るる作を掃き
いさやちして汁よせんとしてあをたあし石を取て
た一歩ふく投付に謀りて傍る岩よあうけさ
石裡のひきまふせらきて起わを四方を足さる
とドそのとと又石を投つれはかいて起くとそ
生るるいさやちと石ををさして邊りて
を陰さんと教角を標よされ命を限りと逃る不
作氣のち不入一裡ととぬ縁念まに持る石を教
おりに投付が誰ういさやち何奴をれの狼藉を茶
それらまよ捕へよく農民まよに大勢引て是柄に

てとみゆははの謙信云の掃除奉新泥に固を固
髪をたより頬骨まで薬の石よりあられまにぬて
大より一髪と土民の誰にたのほき武士の面は疵を
つりし水とこれく白状させ其えよて首とくねすく
いひせせし物とといせだ様ふいぐに柄抄をぬて
自分の水責何とぞ苦痛を遁きんといひりて
そつばさう不詮さう故されどあの山陰へ連りて
首討せと下知さる小を一云いさむ考りて
そを思て引おと他系は是他をさ富部妻子が
死後よりほをきうばや款え痛りしあをを

襟は堪つてい山陰にぬれり一心不礼は日月とをへ
かまぬまくと覚悟のふと挑燈よあまを思へるカ
飯しろ小まふまの繩をい法のてく首とせ人あ
髪をたわけ勤くはいるの云系此下つとんがさむ
カのをいやりハツト思ひてあ後ととさ布一が暫くあう
て雪肌つと眼をむきかすをい申れ刻あつ同のあ
目わー南云云やう程めが一といひ欠くとふふうぬ
はささかうてをいしりつかるをてく考られぬ
日耕とる田地ひうをたれを妻やまの井つく
源よるをいあの他を清よるとあひする他を清れう

ぬ親付て何れもあはれに申すにいとつらき事な
り候へばさればよ今細おとまき登殿もも
ゆへは若衆もあはれに作生儀の今細うへは奉
新様も作生儀の何れも不意なる事ありと
あつたさうも申す候へば何れもあはれに
され候へばおれもあはれに申すにいとつら
に候へばさればよ今細おとまき登殿もも
ゆへは若衆もあはれに作生儀の今細うへは奉
新様も作生儀の何れも不意なる事ありと
あつたさうも申す候へば何れもあはれに
され候へばおれもあはれに申すにいとつら

新選百物語

志のせと親子二人とて合まらぬは
なまがかりのちと茶漬の酒のめんて
まげらふて五六盃あつたや
ら碎かたついと枕の上へ
さらさらせせせとあはれに
りくりあはれ茶村の間に
いかにせんと思ふおし
そよだ力を得て田地も
善にまゐりあはれに
よむらとておとまき

あきれかせんかどなく逃つて朱をけりていへり
是れ又及を返し不て花をあり朝とく君の
とあむる方一葉ととり後若びりか中とく
満とらむ間をさうさう女のあて頻又起り
あ何して房やちかきつ又及さる者さるれば
女房さいつくと後を及れ我が家の若に
おりのしり一皮をば二度中とく三皮
狸の仇作さる懼れをいむとけり
され果て其のちの狸けいへり及さる狸を
怒勢又珍獲をりて初とれれば人狸の化
と異名をほちく呼あへり

新選百物語巻一終